

今を 読み解く

京都大学特任教授
中野 不二男

ヴァージンギャラクティック

本が、いくつか出でてきた。

社による宇宙旅行ビジネスが、
年内にスタートする。料金は、
3日間の事前模擬フライトも含
めで一人25万米ドル。高いこと

は高いが、豪華客船で世界一周
とかの範疇に、ちょっとだけ近
づいたような気がする。

旅先での経験が楽しみである
旅行に対し、宇宙旅行は機内か
ら出ることができない。しかし
ダイオウイカで盛り上がった深
海への興味と同様、未知の領域
に対する人々的好奇心は強くな
っている。それが、自分も宇宙
で無重力を体験したいといふ
“新旅行”を生み出した。

宇宙旅行が宇宙産業の一分野
になることは、確実だ。しかし
日本では、宇宙は「青少年の夢」
である。有人宇宙輸送機の開発
は、リスクを伴う可能性を否定
できないが、「夢」ならば具体
的な問題や開発計画など触れない
こともよい。だから輸送を他国
に依存する宇宙飛行士は輩出す
るが、自国での宇宙旅行産業に
は、いっぽうマスメディアも、宇
宙といえば「夢」を枕詞に、技
術や安全保障など本来の具体的
な領域には触れたがらない。結
果として日本人にとっての宇宙
は、「青少年の夢」のままだ。

● 計画実現の作業

そういう状況にしびれを切ら
したのかどうかわからぬが、「具
体的な宇宙開発」に関する

3年)は、サブタイトルの「宇
宙ミッションをいかに実現する
か」がすべてを物語っている。
通信衛星のようなインフラは、
企業活動や政策から生まれるケ
ースが多い。しかし惑星探査機
の場合はどうか。「その惑星に



宇宙旅行学



おいて観測をしたい科学者が、
このよう観測をしたいが宇宙
工学的に実現可能なかと技術
者に相談することから始まりま
す。逆に技術者が、こういう新
しい技術を開発したので、この
ような新しい観測方法や新しい
ミッションが実現できるが、科
学者の観点からどう思うかと相
談することもあります」

科学と技術の両輪により、探
査計画が生まれることがよくわ
かる。さらこうして芽吹いた
計画を実現に移すために、軌道
・13年)も、宇宙技術をわかり
やすく説いている。多段ロケット
の速度計算式まで示している
が、図解と説明を読みながら、
宇宙航空研究開発機構(JAX
A)のホームページから引っ張
ってきた数字を代入すれば、中

新ビジネスの可能性

「航空のように国民の誰もが買
えるサービスであるべき」だと
いう発想で、経済性の面からも
取り組まなければならぬと主
張し、経済効果も踏まえていく
つもビジネスモデルを提案し
ている。

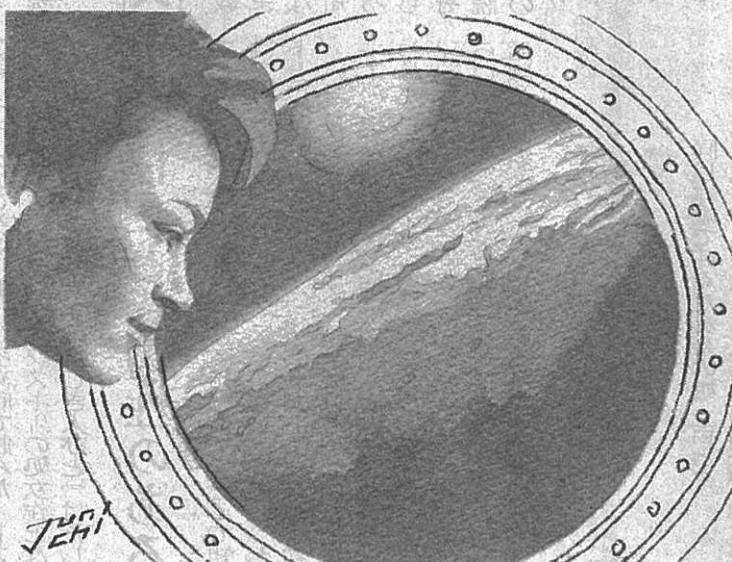
藤井・並木、コリンズの著書
とも、帯に「夢は技術で現実に
なる」とか「宇宙旅行は夢では
ない」とあるが、研究や開発の
現場にいる人々は実現を前提に
しているから「夢」という言葉
は使いたがらない。出版社の営
業部あたりが付けたのだろう。

ヴァージンギャラクティック
社の8人乗り宇宙機運航のみな
ず、国際宇宙ステーション(I
SS)への補給物資も民間口ケ
ト会社が輸送をはじめた。宇
宙空間を海洋のように、活動の
場として利用するビジネスが生
まれているのだ。

学生でもきっと具体的な宇宙技
術を味わえるだろう。
また、宇宙産業の裾野が拡大
されば、「宇宙開発が特別な
ものではなくなりますし、みな
さんが宇宙産業に関わるチャン
スも生まれてくるといえます」
という言葉は重要である。「宇
宙の仕事をしたい」という子ど
もたちに、「それならJAXA
へ」しか回答がないような国で
は話にならない。

● 旅行事業を提案

パトリック・コリンズ『宇宙
旅行学』(東海大学出版会・13
年)はそのもののズバリ、商業宇
宙活動としてもっとも拡大が望
める宇宙旅行産業についてであ
る。宇宙飛行が税金で行われる
だけでは、ガガーリンの時代と
何ら変わらない。宇宙旅行は
「航空のように国民の誰もが買
えるサービスであるべき」だと
いう発想で、経済性の面からも
取り組まなければならぬと主
張し、経済効果も踏まえていく
つもビジネスモデルを提案し
ている。



一般の人々が参加できる宇宙旅行への期待が高まつて
いる